

石垣りんの家ノミヅカ

田中俊廣

重層性—浪池を引きたる

☆「書」(「書」8.22)「書」8.22

☆「書」(「書」8.22)「書」8.22  
☆「書」(「書」8.22)「書」8.22  
☆「書」(「書」8.22)「書」8.22

新井博美

読解

冷徹なまぶさの客観描写  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22

「生活詩」の傷む者の詩「書」(「書」8.22)「書」8.22

「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22

変化

清國軍行 戦中の散文(小説)の注目  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22

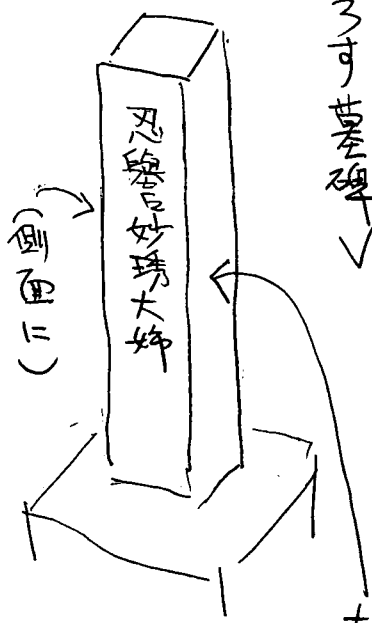
☆「書」の題名と題意

「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22  
「書」(「書」8.22)「書」8.22



「母の田」の女  
「父の田」の女  
「母の田」の女  
「父の田」の女

大正十一年三月二十六日  
大正十一年三月二十六日  
大正十一年三月二十六日  
大正十一年三月二十六日



大正十一年三月二十六日  
大正十一年三月二十六日  
大正十一年三月二十六日  
大正十一年三月二十六日

「母の田」の女  
「父の田」の女  
「母の田」の女  
「父の田」の女

「母の田」の女  
「父の田」の女  
「母の田」の女  
「父の田」の女

「母の田」の女  
「父の田」の女  
「母の田」の女  
「父の田」の女

男は 鯛の生きづくりと注文した。

鯛はありませんが鱈ならありますと 店員が答えた。

運ばれてきた皿の上で口を天井に仰向け

自分の姿態をスカートのようにひろげてみせた魚。ひらかれ そがれ 並べられた

白く透きとおるほどの身の置きどころ。お酒をやると喜びます

店員が言った。男がとつくりを手に

魚の口から酒をそそぐとパクッとうごいた。

もう一口！

連れの女もまねた。

それから互に杯を傾け合った。酒は半身の冷たい絶壁を

骨づたいに 熱く 熱く 落ちて行った。――まだ生きている。

(青森県八戸)

私の前にある鍋とお釜と燃える火と

(日本の前にある鍋とお釜と燃える火と四四三)

それはながい間 私たち女のまえに

いつも置かれてあったもの、自分の力にかなう

ほどよい大きさの鍋やお米がぶつぶつとふくらんで

光り出すに都合のいい釜や劫初からうけつがれた火のほてりの前には

母や、祖母や、またその母たちがいつも居た。その人たちは

どれほどの愛や誠実の分量をこれらの器物にそそぎ入れたことだろう、

ある時はそれが赤いにんじんだったりくろい昆布だったり

たたきつぶされた魚だったり

台所では

いつも正確に朝昼晩への用意がなされ用意のまえにはいつも幾たりかの

あたたかい膝や手が並んでいた。ああその並ぶべきいくたりかの人がなく

どうして女がいそいそと炊事など繰り返せたらう？

それはたゆみないいつくしみ。無意識なまでに日常化した奉仕の姿。

炊事が奇しくも分けられた女の役目であったのは

不幸なこととは思われない、そのために知識や、世間での地位が

たちおくれたとしてもおそくはない

私たちの前にあるものは鍋とお釜と、燃える火と

それらなつかしい器物の前でお芋や、肉を料理するように深い思いをこめて

政治や経済や文学も勉強しよう、それはおごりや栄達のためでなく

全部が 人間のために供せられるように

全部が愛情の対象あって励むように。

原子童話

戦闘開始

二つの国から飛び立った飛行機は

同時刻に敵国上へ原子爆弾を落しました

二つの国は壊滅しました

生き残った者は世界中に

二機の乗組員だけになりました

彼らがどんなにかなしく

またむつまじく暮したか――

それは、ひょっとすると

新しい神話になるかも知れません。

挨拶

原爆の写真によせて

(一九四九・九)

あ、この焼けただけ顔は

一九四五年八月六日

その時広島島にいた人

二五万の焼けただけ顔のひとつ

すでに此の世にないもの

とはいえ

友よ 向き合った互の顔を

も一度見直そう

戦火の跡もとどめぬ

すこやかな今日の顔

すがすがしい朝の顔を

その顔の中に明日の表情をさがすとき

私はりつぜんとするのだ

地球が原爆を数百箇所持して

生と死のきわどい淵を歩くとき

なぜそんなにも安らかに

あなたは美しいのか

しずかに耳を澄ませ

何かが近づいてきはしないか

見きわめなければならぬものは目の前に

えり分けなければならぬものは

手の中にある

夕刻

私は国電五反田駅で電車を降りる。

おや、私はどうしてここで降りるのだろう

降りながら、そう思う

毎日するように池上線に乗り換え

在原中延で降り

通いなれた道を歩いてかえる。

見慣れた露地

見慣れた家の台所

裏を廻って、見慣れた小さい玄関

ここ、ここはどこなの？

私の家よ

家って、なあに？

この疑問、

家って何？

半身不随の父が

四度目の妻に甘えてくらす

このやりきれない家

職のない弟と知能のおくれた義弟が私と共に住む家。

柱が折れそうになるほど

私の背中に重い家

はづみを失った乳房が壁土のように落ちそうなる

そんな家にささえられて

六十をすぎた父と義母は

むつまじく暮している、

わがままをいいながら

文句を、合いながら

私の渡す乏しい金額のなかから

自分たちの生涯の安定について計りあっている。

この家

私をいらだたせ

私の顔をそむけさせる

この、愛というもののいやらしさ、

鼻をつまみながら

古い日本の家々にある

悪臭ふんぶんとした便所に行くのがいやになる

それで困る。

きんかくし

家にひとつのちいさなきんかくし

その下に匂うものよ

父と義母があんまり仲が良いので

鼻をつまみたくなるのだ

きたなさが身に沁みるのだ

弟ふたりを加えて一家五人

そこにひとつのきんかくし

私はこのごろ

その上にごむことを恥じるのだ

いやだ、いやだ、この家はいやだ。

一九四五年八月六日の朝

一瞬にして死んだ二五万人の人すべて

いま在る

あなたの如く、私の如く

やすらかに 美しく 油断していた。

(一九五二・八)

年をとって半身がなくなつた父が  
それでも、母に手をひかれれば

まるで四つん這いに近い恰好で歩くことができる。

あのひきずるような草履の音は

まだ町が明けやらぬころから

泣いたり、わめいたり、甘えたりしながら  
母にすがつて歩き廻る、父の足音だ。

もう絶対に立ち直ることのない

いのちのかたむきを

こごめた背中をやつと支え

けれど、まだすさまじい何ものかへの執着が  
父をいらだたせ、母の手をさぐらせている。

あの足音

ずる、ずる、とひきずる草履の音。

自分たちが少しでも安楽に生きながらえるため

一生かかつて貯めたわずかな金を大事にしている

そして父は、もう見得も外聞もかまわず

粗末な身なりで歩く

道ですれ違えば

これが親か、と思うような姿で。

その父と並んで

義母も町を歩いている。

買物袋を片手に、父の手をひき

父の速度にあわせて、母は歩くのだ、

人が振り返ろうと心にもとめず

まるでふたりだけの行く道であるかのように。

夫婦というものの

ああ、何と顔をそむけたくなるうとまじさ

愛というものの

なんと、たとえようもない醜悪さ。

この不可思議な愛の成就のために

この父と義母のために

娘の私は今日も働きに出る、

乏しい糧を得るために働きに出る。

ずるずる、と地を曳くような

地にすべりこむような

あの、父の草履の音

あの不可解な生への執着、

あの執着の中から私は生まれてきたのか。

やせて、荒れはてた母の手を

ただひとつの希望のように握りしめて

歩きまわる父、

あのかさねられた手の中にあるものに

また、私もつながら

ひきずられてゆくのか。

シジミ (『生まれながら』昭43)

夜中に目をさました。

ゆうべ買ったシジミたちが

台所のすみで

口をあけて生きていた。

「夜が明けたら

ドレモコレモ

ミンナクッテヤル」

鬼ババの笑いを

私は笑った。

それから先は

うつすら口をあけて

寝るよりほかに私の夜はなかった。

くらし

食わずには生きてゆけない。

メシを

野菜を

肉を

空気を

光を

水を

親を

きょうだいを

師を

金もころも

食わずには生きてこれなかった。

ふくれた腹をかかえ

口をぬぐえば

台所に散らばっている

にんじんのしっぽ

鳥の骨

父のはらわた

四十の日暮れ

私の目にはじめてあふれる獣の涙。

海辺

ふるさととは

海を蒲団のように着ていた。

波打ち際から顔を出して

女と男が寝ていた。

ふとんは静かに村の姿をつつみ

村をいこわせ

あるときは激しく波立ち乱れた。

村は海から起きてきた。

小高い山に登ると

海の裾は入江の外にひろがり

またその向こうにつづき

巨大な一枚のふとんが

人の暮しをおし包んでいるのが見えた。

村があり

町があり

都がある

と地図に書かれていたが、

ふとんの衾から

顔を出しているのは

みんな男と女のふたつだけだった。

墓 (『略歴』昭54)

ほんとうのことをいうのは

いつもはずかしい。

伊豆の海辺に私の母はねむるが。

少女の日

村人の目を盗んで

母の墓を抱いた。

物心ついたとき

母はうごくことなくそこにいたから

母性というものが何であるか

おぼろげに感じとった。

墓地は村の賑わいより

もっとあやしく賑わっていたから

寺の庭の盆踊りに

あやうく背を向けて

ガイコツの踊りを見るところだった。

叔母がきて

すしが出来ている、というから

この世のつきあいに

私はさびしい人数の

さびしい家によばれて行った。

母はどこにもいなかった。

鮎

(『夏』昭54)

さかのぼるのよ。

どこか知らない

知らないところへ

私たち。

空には幾筋もの流れ

かつてちちははが

光に濡れてそこをたどった

地図にない川。

いま私の中の血が

私に命じる

帰って行けど。

ふしぎなふるさと

やがて何事かを果たし終わるところ。

初夏の早瀬に

つかのま見せた魚影

細い指先

あれはだれ？

こちらへ

と言って消えた。

墓

いつか裸になって

骨だけになって

あの家族風呂のようなところへ。

みんなが露天風呂はいいと言う

たしかに先祖代々

屋根のないところへ入っていった。

あたたかいに違いない。